

女子部 高等科

「世界遺産と人のつながり」

吉田 絢 近藤紫織

世界遺産について何らかの興味関心を抱いている生徒が4人集まり考えを深めた。歴史、建築、経済の3テーマに絞り、全員の関心事項を含んだ未完成の世界遺産である、サグラダ・ファミリアの歴史、建築が始まった背景、経済効果を調べ検証した。学習の過程では、世界遺産検定マイスターの資格をお持ちの方、エジプトの文化財保護に関わられた方にお話を伺った。

調べたこと、専門家に教えていただいた知見、自分たちの意見をまとめ、口頭発表を行った。同年に沖縄県の首里城、英国のノートルダム大聖堂が火災に遭い、大きく報道された。このグループ以外の生徒も関心を寄せている人が多くいたため、発表では来場された方とともに考えられるよう工夫した。

I. はじめに

4人は、世界遺産に漠然と全体的な興味を持ってはいたものの、一つのテーマに絞って考えていくことが困難な時間が長く続いた。

夏休みから9月までは、以下の2つを実行した。必ず2冊以上の文献にあたってみることで、世界遺産に関する基礎知識を身につけて、興味を深めたい糸口を見つけるために、世界遺産検定3級を受験することである。検定には4人中3人が合格した。

2学期には、学内の人脈から専門家のお二人をお呼びし、レクチャーと質問の時間を持ったことで、より深く学習したいことが明確になった。

社会科の学習や、日頃の報道への関心が今回の学習へとつながった。高等科2年の少人数での取り組みだったため、生徒の主体性を重視し、教員は伴走を意識して指導にあたった。

II. 報告会までの学習と準備

当初は、ステンドグラスやいくつかの遺産に関する歴史的背景に興味がある生徒がいたものの、全員が一致する関心事はなかった。あるテーマから見た世界遺産全体を俯瞰するのか、一つの遺産に限定するのかを決めるため、検定を利用した知識習得に努めた。学習にあたり、世界遺産検定のテキストを全員が揃えた。

検定受験後は全員の調べていきたい方向性が具体的に話し合えるようになった。そこで、多くの関心事が重な

る対象として、サグラダ・ファミリアに絞って学習していくことが決まった。

建築の構造を理解するために、300分の1サイズのペーパークラフト模型を作成した。約400パーツにも及ぶ模型は、解散後の時間を利用して組み立てていった。

専門家の2名の方にお話を伺う機会も得た。世界遺産検定マイスターの片岡秀夫先生と、JICA「大エジプト博物館保存修復センター」(GEM-CC)プロジェクトに参画された、ICOM(国際博物館会議)所属の松田泰典先生である。

片岡先生には、世界遺産にまつわる条約、価値、ユネスコの三大事業等をお話いただいた。世界遺産を学ぶ意味についてのお話にご感銘を受けた生徒が多く、口頭発表に直接つながる知見を得た。

松田先生からは、遺産を守り伝えるとはどういうことであるか、またその方法を教えていただいた。どちらの先生にも質問を受け付けていただき、大きすぎるテーマのように感じていた世界遺産に対して、どの角度から切り込んでいくのが良いのか非常に貴重なご意見をいただいた。

具体的な事例はサグラダ・ファミリアだが、ただ調べたことを説明するのではなく、口頭発表を聞いた方が、私たちにできることを考えるきっかけにしてほしいという思いがあり、発表タイトルを「世界遺産と人のつながり」とした。

Ⅲ. 報告の内容

スライドを用いたステージでの口頭発表を14分間で行った。また会場後方にて、完成したサグラダ・ファミリアの模型、発表内容のまとめと補足を盛り込んだポスター展示も行った。

口頭発表の内容は、世界遺産クイズから始まり、発表までの学習方法、世界遺産を学ぶ意義の一つは平和構築につながることにあり、と冒頭で述べた。続いて、サグラダ・ファミリアの建築について、カタルーニャ・モデルニスモ運動、カタルーニャ語にも触れながら解説をした。サグラダ・ファミリアは2026年に完成予定であり、現在も建設中であるが、公式YouTubeが制作した完成予想動画を見せながら、建築様式とステンドグラスについての説明を行った。次に、世界遺産と日本の関わりを、富士山の経済効果を例に説明した。日本からの海外支援としてJICAを通して、850億円寄付していることも、お話を伺った大エジプト博物館の事例を挙げながら述べた。

最後に、ニュースとして身近だった首里城と、フランク・ロイド・ライト建築としてアメリカ合衆国が世界遺産に推薦する可能性のある明日館を取り上げた。人類共通の遺産である世界遺産とその理念を守ることに対し、私たちができることを最後に示した。それは、「世界遺産について学んで理解する」「数字に隠された背景を知る」「世界遺産という文化の象徴を守っていく」この3つである。

世界遺産を学ぶことが、世界平和実現に近づく最初の一歩であるということが報告全体を貫いた視点であった。

Ⅳ. 終わりに

調べたことからもう一歩先へ進む力、気が付く視点を、平時の授業から考えるとかなり多く必要とされる学習であった。教員が指示をして、方向を決めるというスタイルは取らなかったため、4人の生徒はどこを終着点とするのか、自分たちで悩みながら答えを導きだそうとしていた。

一つの教科に限定されたテーマではなく、教科横断的な視点を最初から生徒自身が持ち得た分、かえって幅広く物事を捉えすぎてしまう傾向もあった。

日常の学習の中でどのような力を付けられているのか、物事をどのように見ているのかなど、大きな対象に臨んだことで得られた知識以上の収穫を今後の学びに還元することを期待したい。

参考文献

- ・平山 和充 (2010) 『裏読み世界遺産』ちくまプリマー新書 147
- ・宮澤 光 (2019) 『世界遺産のひみつ』イースト新書Q
- ・中村 俊介 (2019) 『世界遺産: 理想と現実のはざままで』岩波新書